



すぎもと はじめ
杉本 肇 さん

1961年	袋地区茂道生まれ
1979年	水俣を離れ、上京
1993年	再び家族と漁をするため帰郷
2007年	水俣市環境マイスターに認定
2008年	水俣病資料館「語り部」になる

現在、水俣市袋茂道在住。漁師。

私の家族は水俣病発生当時、水俣市で一番南の漁村、茂道集落で「イワシ網漁」を生業としていました。小さな集落の異変は、1954年の「猫のてんかん病」から始まり、トンビが飛べなくなったり、家畜の豚が死んだりしました。1959年、集落で最初の劇症型の患者として、隔離病棟に入院した祖母のことがラジオで実名報道をされたことで、我が家に対しての差別やいじめが始まったそうです。…大きな家族みみたいな集落の絆は、この得体の知れない病気によって崩壊していきました。

そのころ両親が結婚し、私が生まれました。私が生まれるころには網元であった祖父も体調を崩し、母の手のしびれも始まっていたようです。のちに私には4人の弟ができ、私たち兄弟は家族の愛情をたくさん受けて育ちましたが、親たちの体調はますます悪くなっていきました。

1969年、病状が悪化し、祖父は亡くなりました。生まれた時から家族の誰かが入院するのは日常だったのですが、祖父の死は思ってもいなかったので、突然のことに大きなショックを受けました。

両親の体調も心配だったので、家事や仕事の手伝いも兄弟で頑張りましたが、私が5年生になったころ、父の胃の病気が悪化し、手術をすることになりました。母は父に付き添い、3か月間、兄弟だけで過ごさなければならない期間がありました。その3か月は不安だらけの毎日でしたが、私は水俣病である家族のことを誰にも話しませんでした。それは、差別されるのが怖かったからです。そんな私たちを助けてくれた人たちは、大学生や支援者と呼ばれた人たちです。一緒に家の仕事をしてくれたり、相談にもものってくれました。

祖父が仲間たちと起こしたチツソに対する裁判（第一次訴訟）も、6年生の春には終結を迎え、患者としての権利を勝ち取ることができましたが、それからも病気との戦いは長い間続くのです。

私の祖父母、両親はもう亡くなりましたが、水俣病になり一番つらかったことはなんだったのでしょうか。両親は「患者に対する差別です」と言っていました。病気になったつらさより、人としての尊厳や絆が崩壊するのがとてもつらかったのだらうと思います。

水俣病は環境破壊から始まりました。あなたの周りの「環境のこと」や身の回りでおこりうる「差別のこと」を想像しながら勉強してください。